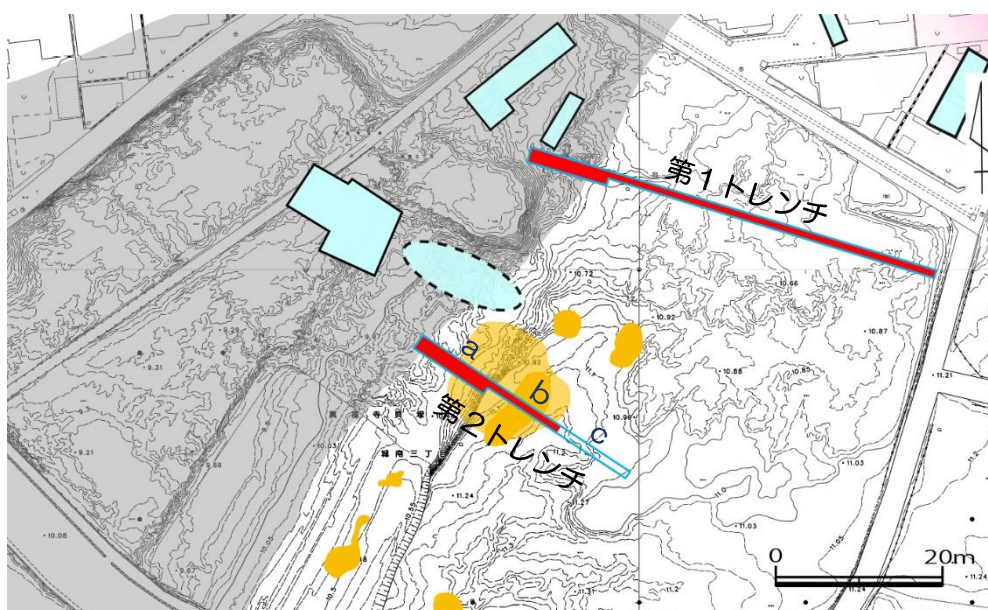


令和2年（2020）

■ 11月6日（金）

次第に日没の時間が早くなり、作業時間の終わりが近づくと、木立の長い影が縄文時代の土層の上に射しかかります。

11月は、近隣小学校児童の体験発掘調査と、一般の方々向けの現地見学会があり、調査の成果を公開し、皆さんに真福寺貝塚の価値と魅力を直接お伝えするイベントがあります。営為調査を進めながら、それらの準備も進めています。



前月水没した調査区はだいぶ水位が下がりました（第2トレンチ）

令和2年（2020）

①第1トレンチの調査

北側の第1トレンチでは、10月に検出した焼土帯の調査を進めました。出土遺物を取り上げ、床面の確認を行いましたが、柱穴等を確認することはできませんでした。

遺物は、焼土帯近くでは復元可能な個体を含む、後期後葉安行2式を主体としていますが、谷に近い側（写真1の左側）では、晩期初頭安行3a式を主体としています。土層も谷部へ向かって傾斜する様相が見られました。

一方、谷とは反対側、この焼土帯から東側へ数m離れた地点からは、後期後葉安行1式期の土器集積を検出しました（写真3）。数個体分の大型破片が集積していました。

この安行1式の土器集積がある地点から、西側の谷部へ向かって、出土する遺物が新くなる傾向があり、焼土帯周辺で後期後葉安行2式、さらに西側で晩期初頭安行3a式、一番西の



≫写真1 焼土帯西側の土器群



≫写真2 全容を現した小型の浅鉢
※「10月」の写真2で紹介した浅鉢です



≫写真3 縄文時代後期後葉の土器集積

令和2年（2020）

水際で晩期前葉安行3b式と、大きく4時期に分かれています。

なお、安行3a式土器が出土する周辺では、地山（関東ローム層）は、現在の地表面の下160cmよりも深いところにあることを、検土杖（けんどじょう。土の堆積状態を簡便に調べる筒状の工具）で確認しました。したがって、北側の谷部周辺も南側の谷部同様、遺物包含層が谷を埋めるように厚く堆積していることが予測されます。

②第2トレンチの調査

南側の第2トレンチでは、引き続き東側の窪地と西側の谷の間（cの区画）で調査を進めました。

おおむねローム層上面まで掘り進めました。調査区東側には、晩期中葉の黒色土が薄く堆積しており、黒色土の下からは、晩期中葉の土坑を4基検出しました。

そのうちの1基の土坑では、確認面には石皿の破片を含む角礫が4個まとまって出土し（写真4）、その下層からは、磨石が3個まとまっていました（写真5）。なお下層からは、晩期中葉大洞C2式の浅鉢口縁部片が出土しました。



≫写真4 土坑の上層で礫が集積



≫写真5 礫の下から磨石3個の集積